

『大平廣記』収録「張雲容」

― スタロステイナ論文の中国版「眠り姫」と林羅山の『怪談全書』

横 道 誠

― はじめに ― 中国・西洋・日本

柳田國男は「比較民俗学の問題」でつぎのように述べた。

最近に芬蘭のF・F・Cから、独逸の或学者の研究した支那の民間説話の総索引のやうなものが刊行された。是を見て行くとグリム・アファナシエフを始め、西洋の説話集の幾つかに採録せられたのと同系のものが半ばに近く、その又大部分が日本にも朝鮮半島にも、ほんの僅かばかり形を変へて、共に行はれて居るといふことがわかる。此書が出なかつたら西洋の学者はいふに及ばず、我々も亦単なる日鮮の間の一致だけを珍重して、どういふ結論に進んで居たか知れないのである。昔話の分布には殊に説明のまだ少しも出来ない、法則が働いて居るかと思ふ。いかに想像を逞しくしてみても、誰がどうして持つて来て、どんな人が悦んで聴いて記憶したものか、私などには見当が付かない。多分其流伝が非常に古い

昔に行はれ、それが又甚だしく永く保つ性質を持つて居たのであらう。さうしてこの不思議の環には、我々二つの民族は共に大きな座を連ねているのである。⁽¹⁾

「芬蘭のF・F・C」は、カール・クロンとアクセル・オルリックが中心になつてヘルシンキに設立した「民俗学交流会」(Folklore Fellows' Communications)を指している。「独逸の或学者の研究した支那の民間説話の総索引のやうなもの」とは、ドイツの中国学者ヴォルフラム・エーバーハルトが一九三七年に出版した『中国民間説話の型式』⁽²⁾のことである。柳田は中国の伝承への西洋からの接近に接して、日本が朝鮮とともに世界の伝承の「不思議の環」に入っていることに思いを馳せている。みずからも伝承の比較研究に従事した南方熊楠の場合は、西洋から中国への同様の接近が先取権をめぐる気がかりになつた。よく知られた「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」には次のようにある。

さて予二十三年前在米の間、『西陽雜俎』続集卷一に、支

那のシンダレラ物語あるを見出し、備忘録に記しおき、その後土宜法竜師などに報ぜしことあり。英国の俚俗学会、かつて広く諸国に存するシンダレラ物語の諸種を集め、出版せし一冊あり。予在外中、好機会多かりしも、多事なりしたため、ついにこれを読せざりしぞ遺憾なる。近日ロンドンの学友を頼み、右の書に支那のシンダレラ譚ありやと調べもらいたるに、全くなしとの返事なり。しかし、その人かかすることに趣味を持たざれば、実際は知れず。とにかく、自分せっかく久しく取っておきの物を、そのまま埋め去ることの惜しまるれば、ここにその文を載す。たとい、すでに学者間に知悉されしことなりとも、この物語を、欧州特有の物と思ひおる人々の、耳目を広むるの少益ありなんか。

「英国の俚俗学会」の「一冊」はマリアン・ロールフ・コックスの『灰かぶり——灰かぶり・猫皮・蘭草の頭巾の三四五の異型』（一八九三）⁽⁴⁾にあたる。ちなみに「ロンドンの学友」からの連絡どおり、コックスの著作に中国版の「灰かぶり」は収録されていない。南方のこの論文は、西洋人が、植民地政策と平行するかのよう、学問の分野でも東洋への進出を進めていたという事態への一種の対抗意識によって、世に送られたのであった。

西洋留学の経験をもつ柳田や南方が、洋の東西の關係にさまざまな思いをめぐらせながら、歴史的に日本と深く関わってきた中国の伝承に熱い視線を注いでいたことは不思議ではある

まい。そして彼らの抱いた思いは、現代の私たちにとってまったく追体験できないものというわけではない。現代の私たちも海外の伝承研究に接すると、折々、右にあげたような柳田や南方の感覚を味わう機会にめぐまれる。本稿で注目したいのは、ロシアの女性中国学者アグラヤ・スタロステイナ (Агрия Сталостейна) 博士が『FABULA』二〇一一年五十二卷三／四号に発表した論文「中国中世版の眠り姫」⁽⁵⁾である。

二 スタロステイナ論文

この論文が、口承文芸の国際比較研究において権威的な存在と言える『FABULA』に掲載されたものであることは強調されてよいだろう。『FABULA』の発刊者はクルト・ランケ——国際口承文芸学会 (ISFNR) と『口承文芸百科事典』(Enzyklopädie des Märchens) をも設立した最近半世紀で最大級の影響力をもった伝承研究者である。『FABULA』は現在(二〇一五年時点)、ランケの弟子ハンス・イェルク・ウター⁽⁶⁾とショジャエイ・カワンおよびドリス・ボーデンを中心に刊行されている。編集協力者のひとり、国際口承文芸学会の副会長や日本口承文芸学会の会長を務めた小澤俊夫である。

スタロステイナ論文は次のように始まる——これまで『民間説話の型式』(AT/ATU)⁽⁸⁾や中国専門の民間説話目録各種⁽⁹⁾のいずれにも、中国版の「眠り姫」型伝承は記載されてい

かった。『口承文芸百科事典』で最古の「眠り姫」伝承とされているのは、欧州の十四世紀で成立したものである。^⑩ところが、十世紀に北宋で成立した類書『太平廣記』に収録された二編の説話は「眠り姫」型伝承のプロットをもつ。三十三卷（神仙三十三）に収録された「申元之」と第六十九卷（女仙十四）に収録された「張雲容」がそれであり、この二つは部分的に重なっている。

そして次のようにつづく——しかし、西洋版の「眠り姫」と全体が符合するのは伝奇小説として成立した「張雲容」だけである。「申元之」は神仙の神秘を伝えることを目的とした仙伝集の一編であり、「眠り姫」の物語としては不完全である。もともと「張雲容」は裴鉶の『傳奇』に「薛昭伝」という題名で収録されていた。他方、「申元之」は杜光庭の『仙傳拾遺』から採られたものである。ふたつの著作は九世紀に成立したが散逸し、二〇世紀になってから『太平廣記』などの後世の採録本から復元の試みが成された。

スタロステイナが西洋版の「眠り姫」に対応するものとして報告する「張雲容」の中国語原典と諸本の異同についての情報は、注（11）にあげた文献を参照されたい（『太平廣記會校』）。邦訳については、筆者が勤務先の紀要に発表したものが初訳である。^⑪「張雲容」の梗概はつぎのとおりである。

薛昭は正義感であったが運命が狂って逃亡犯の身となり、旧

友から隠れ家と美少女を得られると聞き、竹林と垣根を超えて古びた行宮に入ってゆく。三人の美しい少女たちが現れ、犀遊びによって少女のひとりが薛昭と結ばれることになる。彼女が張雲容である。張雲容が語る身の上話によると、この少女は玄宗の時代に楊貴妃に仕えていたが、病に倒れて夭折し、埋葬されたという。しかし生前に道士から死を予言されており、運命を変える方術を施され、死は仮死に変わった。百年が過ぎて運命の相手があらわれたため、その人と愛を交わさなければいけない。かくして、新しい恋人たちは祝言をあげ、付き添ったふたりの美少女も含め、四人で吟詠をおこなって、それはさながら歌合戦のようである。ふたりは寝室に入って愛を交わし、棺のなかにあった少女の肉体が死の世界から目覚めはじめる。ふたりの愛は成就し、幸せな人生を送る。

原典・邦訳であれ、右の梗概であれ、これを一読して、ただちに通念どおりの「眠り姫」の物語であると感じる人はそう多くないはずである。スタロステイナの論文以前に、この説話が「眠り姫」として報告されたことがなかったのも無理はないと思われる。しかし、ここで広く流布している「眠り姫」の基本類型についても思い出しておきたい。

ひとりの美しい少女が死の予言を受ける。しかし、その運命

はやわらげられ、百年の眠りに変更される。少女は眠りにおちいる。百年が過ぎて、運命の相手が現れる。この人物は、眠り姫の話を聞きつけ、障害物となつてゐる森と垣根を突破し、宮殿のなかに進入し、少女との愛を成就する。少女は眠りから目覚める。ふたりの愛は成就し、幸せな人生を送る。

この基本類型は、まぎれもなく「張雲容」の梗概に合致している。つまり、「張雲容」に含まれた細部を大掛かりに捨象することが許されるならば、この説話を私たちが知っているとおり「眠り姫」に還元することができるのである。

もし「張雲容」が「眠り姫」だとすると、その意義はきわめて大きい。なぜならば、それはこれまで最古の、そして近代以前の伝承としては初めて欧州の外で発見された「眠り姫」だからである。¹⁴

三 西洋版との対照と弁護

それでも大幅な「捨象」や強引さを感じさせる「還元」を経なければ「眠り姫」と見なせない「張雲容」は、そもそも本当に「眠り姫」なのかと疑われても当然であろう。

そこで、以下では想定される反論を挙げつつ、西洋の伝統的な「眠り姫」の諸版やスタロステイナの見解の紹介を中心的な参照項として、スタロステイナ論文の擁護をおこないたい。既

知の「眠り姫」伝承の基本的な見取り図や書誌情報については『口承文芸百科事典』の該当記事（注¹⁰）の文献¹⁵、特に中世の西洋版についてはエステル・ザーゴの論文¹⁵、加えて筆者の既発表論文（注¹⁴）の文献¹⁶を参照されたい。

（一）張雲容が「眠り」でなく「仮死」に落ちること——カタルーニャ語の「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセル」でもまったく同じく、「眠り姫」は「眠り」ではなく「仮死」に陥る。¹⁶

（二）「張雲容」は男性の薛昭の冒険譚であり、「眠り姫」の物語はその一部にすぎないこと——フランス語の『ペルスフォレ物語』は多数のエピソードが織り合わされた長大な騎士道ロマンスであり、そのなかで「眠り姫」の物語はエピソードのひとつにすぎず、しかもプロットは男性である騎士トロワリュスの冒険譚として展開する。¹⁷カタルーニャ語の「ブランディン・デ・コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」は、スタロステイナも「張雲容」との類似性を指摘するものであるが、騎士ブランディンの冒険譚の中心に「眠り姫」の物語が置かれてゐる。¹⁸

（三）「張雲容」では美しい少女はひとりではなくて三人であり、張雲容とともにふたりの少女（蕭鳳臺と劉蘭翹）が現れる——三人は女友達であるが、物語は薛昭と愛を交わす権利を得た張雲容の身の上話を中心に展開するため、ふたりは付添人のように振る舞う。『ペルスフォレ物語』では、美少女ゼランディーヌに、性愛の女神ウェヌスが付き添っている。¹⁹「ブランディン・デ・

コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」でも、眠るブリアンダは七人の侍女を付き添い人として従えている。⁽²⁰⁾

(四)「張雲容」は王女や姫君ではなく侍女にすぎない——「ブランディン・デ・コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」でもブリアンダは高い身分の女性とされるが、「王女」ではない。また「張雲容」は薛昭と接している時点（仮死状態の体から出てきた霊体）では、ふたりの女友達とともに、みずからが主人として侍女たちをしたがえている。つまり張雲容も身分の高い女性として登場する。

(五)「張雲容」は、玄宗と楊貴妃の恋物語の余話という位置づけをもつ道教説話であり、しかも幽霊譚の要素ももつ——『ペルスフォレ物語』、「フライレ・デ・ジョイとソル・デ・プラセル」、「ブランディン・デ・コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」は中世キリスト教の騎士道物語として成立した。『ペルスフォレ物語』はアーサー王伝説とアレクサンドロス伝説の壮大なアマルガムであり、「眠り姫」はその余話である。スタロステイナは、もともと単純な「眠り姫」型伝承が西方から中国に流入し、そこで道教説話に仕立てなおされ、かつ玄宗と楊貴妃に関連づけられ、流行の幽霊譚の要素も加えられたのだろうと推測する。⁽²¹⁾

(六)「張雲容」では予言と方術をおこなうのは男性の道士である——「ブランディン・デ・コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」でも男性である眠り姫の父が魔法をほどこす。⁽²²⁾

(七)張雲容は目覚める前に肉体から離れて薛昭の前に現れて、みずから復活の手ほどきをおこなう——「ブランディン・デ・コルノアルハとギロット・デ・ミラマール」では、「眠り姫」のブリアンダは眠った状態で（このあたりの経緯は神秘的で不可解な描写）ブランディンの前に女性を送りこみ、眠るみずからの許へと導かせる。⁽²³⁾

(八)「張雲容」での愛の成就是口づけでなく性交渉である——『ペルスフォレ物語』とジャンバッティスタ・バジレによるイタリヤ語ナポリ方言の「太陽と月とタリーア」では、眠ったまま性交渉がおこなわれ、それが原因となって魔法が解かれる。⁽²⁴⁾「口づけ」の要素は、通念として流布した「眠り姫」のイメージを決定したグリム兄弟の版「茨姫」の特徴であり、普遍的な要素ではない。

(九)「張雲容」では薛昭と張雲容、そして張雲用のふたりの女友達がつぎに吟詠をおこない、歌合戦の様相を呈する——歌の要素は西洋の「眠り姫」には見られない。しかし、ここで視点を変えて、日本の「灰かぶり」として知られる「米福禰福」（「米福禰福」を思い出してみよう。その一部の伝承では——「皿ヶ山」と重なる）——歌合戦が展開する。⁽²⁵⁾「張雲容」の歌は、伝承本来の可塑的性質を考えると、それほど異様なものではないだろう。

以上をもって、スタロステイナ論文のためのささやかな擁護に代えたい。スタロステイナは中国版「眠り姫」の成立過程や

西洋版との関係を推測しており、これについても検討の余地があるだろう。しかし、それには西洋版との詳細な比較が必要であり、本稿の紙幅では果たせない。²⁶⁾

四 日本への伝来

以下では、スタロステイナ論文の発表後、筆者が調査した「張雲容」の日本への伝来と流布について報告しておきたい。

先に言及したとおり、スタロステイナは、既存の口承文芸目録に中国版の「眠り姫」が登録されていないことから論文を説き起こしている。日本版についても、既存の口承文芸に関するレファレンスツールに「眠り姫」は収録されていない。²⁷⁾ 唯一の例外として、『日本昔話通観』の「別巻2」では日本の伝承「運定め 水の運」が収録され、参照用としてのみ西洋の「眠り姫」が言及されている。²⁸⁾ 実際、この日本の伝承では子供が死ぬと予言され、不幸にもそれが成就するという点のほかには、「眠り姫」型伝承との類似性が見られないため、「眠り姫」と見なすことはできない。日本で報告された伝承としての「眠り姫」は存在しない。

二一世紀の日本で「眠り姫」は周知の物語になっているが、それはそもそも翻訳文学として流入してきたものだった。ペローの「眠れる森の美女」は一八九六年、グリムの「茨姫」は一九〇三年にはじめて邦訳された。²⁹⁾ バジールの「太陽と月とター

リア」の初訳は、一世紀ほどのちの一九九五年である。³⁰⁾ その他の西洋版は翻訳されてこなかった。

それでは「張雲容」はどうだろうか。「張雲容」を収録した『太平廣記』に言及した日本の資料のうち、発見された最古のものは藤原孝範の『明文抄』（二二〇〇前後）であり、多くの引用が確認される最初の書物は『医家千字文注』（一三九三成立）だという。³¹⁾ これらの時代に「張雲容」も読まれていた可能性は大いにあるはずだが、邦訳は未発見である。管見の限り、最初の邦訳は林羅山の『怪談全書』（一六四〇年前後成立、一六九八年刊行）である。

広く知られた『怪談全書』の編を日本最初の「眠り姫」の発見と喧伝するのは、あまりに恥知らずである。しかも、それは日本で流布した口承でも書承でもなく、西洋版の「眠り姫」と同じく翻訳にすぎない。しかし、日本で「眠り姫」が流布した時間を二〇〇年ほどさかばらせることを裏付ける資料としては、きわめて貴重と思われるため、ここで敢えて紹介しておきたい。

五 林羅山訳の内容・成立・異同・典拠

林羅山訳の「薛昭」は、『怪談全書』諸本を収録した現代の版本をつうじて容易に接することができる。³²⁾

まずそれは抄訳であり、さまざまな省略がある。「眠り姫」を救済する薛昭の来歴、彼と張雲容を含む三美女との語らいは簡

略にされ、吟詠は完全に削除されている。ちなみに張雲谷の名前は印刷版で張雲「客」となっているが、これは単なる誤植である。⁽³³⁾

『怪談全書』の成立時期は諸説あるが、いずれの論者も寛永十四年（一六三七）から同二十一年（一六四四）にかけての期間を想定である。⁽³⁴⁾ 著者について、長澤規矩也は繰り返して、林羅山ではないと否定したが、これに対して、別人が介入したにせよ羅山作の可能性が高いとする反論が多くの論者から提出された。⁽³⁵⁾ 原本は散逸したが、印刷以前に筆写した諸本——誤字などの異同を除いて同一——が現存している。⁽³⁶⁾ 印刷版は怪談が流行していた元禄十一年（一六九八年）に、成立から半世紀以上、羅山の死（明暦三年、一六五七年）から四〇年以上を経て、京・五条橋通の書肆の福森兵左衛門より刊行された。このときの書名が『怪談全書』であり、著者の名義は法号の林「道春」だった。

「張雲谷」が「薛昭」として収録されているが、これは前述したとおり、本来『傳奇』に収録されたときの題名と考えられる「薛昭伝」にもとづいている。つまり羅山訳の「眠り姫」の直接の出典は『太平廣記』ではない。物語の末尾に「説淵ヨリ」と表記されていることから、嘉靖二十三年（一五四四）年に陸樹の編纂によって刊行された『古今説海』の「説淵部」に収録された「薛昭傳」を出典とすることは明らかである。『怪談全書』の種本には、『太平廣記』も含まれているが、羅山の時代から比較的遠くない時代に出版された『古今説海』は、『怪談全書』の種

本として特に活用されたものであることが指摘されている。⁽³⁸⁾ 『古今説海』に「薛昭」として収録された「張雲谷」であるが、『古今説海』の典拠は『太平廣記』だといふ。⁽³⁹⁾ このあたりの謎を解く鍵は散逸した『太平廣記』の諸本にあると思われるが、本稿の課題ではない。

ところで林羅山が所蔵していた『太平廣記』と『古今説海』は現存しており、国立公文書館で見ることができ、本稿執筆段階（二〇一五年初頭）で前者はすでにウェブサイトでも公開されている。⁽⁴⁰⁾ この羅山旧蔵『古今説海』と『太平廣記會校』の「校異」を照合すると、羅山旧蔵の『古今説海』の「張雲谷」は、『太平廣記』諸本のうち、いわゆる沈本（沈與文野竹齋抄本）に近いことが判明する。珍本の典拠とされるのは、『太平廣記』の現存しない宋代刊行本に依拠しているとされることから、羅山の読んだ『古今説海』の「張雲谷」もその周辺の系統に属するものと考えられる。

六 背景

それでは、多くの論者のいうように『怪談全書』が——他者の手が入っている——羅山によって成立したと考えた場合、その背景はいかなるものだったろうか。

羅山は、その人間性にきわめて低い評価が与えられてきた人である。同時代の人格者として知られる中江藤樹も——当時は

まだ青年だったが――羅山の人格をこきおろしたことがあった。⁽⁴³⁾堀勇雄による伝記は類書のなかでも総合性の高いものであるが、やはり羅山の人格を全否定とも言うべき言葉遣いで罵倒している。⁽⁴⁴⁾しかし、人柄の問題は度外視して禅の時代という時代区分のあとに朱子学の時代という新たな時代区分を切り開くきっかけをつくった人物として穏当な評価を与えられることもある。⁽⁴⁵⁾牽強付会や曲学阿世も、平和と安定をめざした実践だった可能性が指摘されている。⁽⁴⁶⁾羅山は学問の大成者ではなく、それが低い評価につながった面もあるのだが、知の収集家にして啓蒙家としての役割を再評価するべきとも言われる。⁽⁴⁷⁾

羅山による翻訳は、「張雲容」が道教説話という点を考えると、若干不可解である。羅山は儒教と神道の合一を画策し、儒教内部においては賛同する朱子学以外の学派（陸学・陽明学）を排斥し、仏教、キリスト教をも排斥し、道教も例外ではなかった⁽⁴⁸⁾からである。道教と関わりの深い神仙思想やその影響を受けた怪異譚も、羅山にとっては否定の対象だった。⁽⁴⁹⁾羅山は仏教説話を翻訳する際、儒教の立場から批判的に接し、注釈や訓戒によって読者を導こうとしたという。⁽⁵⁰⁾道教説話に対しても同じ方法がありえたと思われるが、『怪談全書』はそのような批判的な注釈・訓戒を含まない。前述した国立公文書館の林羅山旧蔵『太平廣記』『古今説海』に羅山の本音を示す書き込みなどがあれば興味深いと思われるが、前者の「張雲容」や後者の「薛昭伝」に見られる書き入れや補筆は、基本的な説解を支えるためのもの

のにすぎない。⁽⁵¹⁾

『怪談全書』は純粋な娯楽作品として成立したのかもしれない。この書物は、記録によると、もともとは羅山が仕えていた徳川家光が大病の際に献上されたものである。⁽⁵²⁾道教の陰陽思想が部分的に羅山の同意を得たという可能性もあるだろう。⁽⁵³⁾羅山は厳しく排斥しようとした陸学の陰陽思想からも影響を受けていたという。⁽⁵⁴⁾「張雲容」の説話の中心には陰陽原理にもとづいた仮死の術（太陰連形の術）の存在がある。羅山がこれにどのような感じたのかは興味を誘われるが、これ以上の憶測は慎んでおきたい。

七 おわりに

以上、スタロステイナの論文の擁護をおこない、林羅山の邦訳の紹介と考察をおこなった。繰り返しになるが、スタロステイナ論文で報告された「張雲容」が中国版の「眠り姫」だとすると、それはこれまでに発見された最古の「眠り姫」であり、近代以前の伝承としては欧州の外で発見された最初の「眠り姫」である。またその邦訳は、遅くとも一七〇〇前後に林羅山によるものが流布していた。つまり、西洋版が流布した一九〇〇年前後よりも二〇〇年前から日本人は「眠り姫」を楽しみ、かつその事実を忘れていた。もちろん、今後さらに古い邦訳が発見されれば、流布した時代はさらにさかのぼる。

注

- (1) 『柳田國男全集』三四卷、筑摩書房、二〇一四、一四六。
- (2) Eberhard, Wolfram: *Typen chinesischer Volksmärchen*. Helsinki: FF Communications 1937.
- (3) 「南方熊楠全集」第二卷、平凡社、一九七二、二二九。『東京人類学会雑誌』二十六卷三百号（一九一一）に発表。
- (4) Cox, Marian Roalfe, *Cinderella. Three Hundred and Forty-Five Variants of Cinderella, Catskin, and Cap O'Rushes*. Abstracted and Tabulated, with a Discussion of Medieval Analogues, and Notes. With an introd. by Andrew Lang. London: The Folk-Lore Society 1893.
- (5) Starostina, Aglaia, "Chinese Medieval Versions of Sleeping Beauty", *Fabula*. Vol. 52, Issue 3-4, 189-206.
- (6) 従来の『国際民間説話の型式』(*The Types of International Folktales*)の改訂作業をおこなった「A」から「AT」(「U」)人物として著名。
- (7) 以下、注(5)のスタロステイナ論文を要約。
- (8) Aarne, Antti/Thompson, Stith, *The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography*. Second Revision. Helsinki: FF Communications, 1961; Uther, Hans-Jörg, *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson. 3 vol. Helsinki: FF Communications 2004.
- (9) 柳田が言及していた注(2)のエーバーハルトの目録と丁乃通が編纂した英文・中文の目録(Ting, N-t.: *A Type Index of Chinese Folktales in the Oral Tradition and Major Works of Non-Religious Classical Literature*. Helsinki: FF Communications 1978; 丁乃通編『中国民間故事类型索引』华中师范大学出版社(武汉)、二〇〇八を参照。
- (10) Neumann, Harold: „Schlafende Schönheit (AaTh/ATU 410)“, *Enzyklopädie des Märchens*. Bd. 12. Hsg. von Rolf Wilhelm Brednich et al. Berlin/New York: Walter de Gruyter 2007, 13-19. ただし、同時代のやうに古い版や報告がいろいろある。Flutre, L.-F., «Le roman de Pandragus et Libanor par Baudouin Butor. Texte inédit de la fin du XIIIe siècle», *Romania* 94, 1973, 57-90.
- (11) スタロステイナは長年広く使われた中華書局の十巻本を使用している。現在は、この版の問題点を解消するべく使用された二〇巻本が刊行されている。〔宋〕李昉等編『太平廣記會校(附)索引』、張國風會校、全二〇巻、北京燕山出版社(北京)、二〇一〇。
- (12) 第三巻八〇六-八一〇。
- (13) 筆者の論文の付録として「申元之」とともに訳出している(原文・訳注つき)。『京都府立大学学術報告 人文』六六号、二〇一四年、一三-一六五。

- (14) 多くの伝承とは異なって、近代以前の「眠り姫」が採取されたのは欧州においてのみ——それもロマンス語圏においてのみ——である（近似した型の伝承も報告されてこなかった）。横道誠「ドイツ・ナショナリズムの文脈あるいは汎欧州的・超欧州の文脈における「眠り姫」伝承（後編）」『京都府立大学学術報告・人文』六五号、二〇一三・一―三七の概説を参照。
- (15) Zago, Ester: "Some Medieval Versions of Sleeping Beauty. Variations on a Theme", *Studi francesi* 69, 1979 417-431.
- (16) Meyer, Paul, «Nouvelles catalanes inédites», *Romania* 13, 1884, 264-284.
- (17) *Perceforest*. Troisième partie, tome III, éd. Gilles Rousseau, Genève, Droz, 1993. 五〇―五二章と五九―六〇章で「眠り姫」が展開する。
- (18) Meyer, Paul, «Le Roman de Blandin de Comouailles et de Guillot Ardit de Miramar publié pour la première fois d'après le ms. unique de Turin, *Romania* 2, 1873, 170-202. 「眠り姫」は 185-196 で展開する。
- (19) Perceforest, 57-93.
- (20) Meyer 1873, 189.
- (21) Starostina 2011, 195-201.
- (22) Meyer 1873, 188-189.
- (23) *Ibid.*, 185-186, 193-194.
- (24) Perceforest, 78-90, 209-214; Basile, Giambattista, *Lo cunto de li cunti, testo napoletano con traduzione a fronte*. A cura di M. Rak. Milano: Garzanti, 1986, 946-947. 「フライレ・デ・ジョイトとソル・デ・ブラセル」では、性交渉が魔法の解消につながらな。Meyer 1884, 275-284 を参照。
- (25) 関敬吾『日本昔話大成』（角川書店、全二巻、一九七八―九八〇）の第五巻、八六―一六に収録された資料を参照。「皿々山」は同巻一六―二八を参照。
- (26) この課題については、注(13)の筆者論文での試みを参照された。
- (27) 注(8)の『国際民間説話の型式』（AT/ATU）、注(10)の『口承文芸百科事典』、注(25)の『日本昔話大成』、『日本昔話名彙』（柳田国男監修、日本放送協会編、一九四八）、『日本昔話通観』（稲田浩二・小澤俊夫責任編集、同朋舎、全二九巻・別巻全三巻）一九七七一―九九八、Ikeda, Hiroko, *A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature*. Helsinki: Academia Scientiarum Fennica 1971 を参照。
- (28) 『日本昔話通観』別巻2、稲田浩二責任編集、一九九三、一五六―一六〇。

- (29) 『西洋仙郷奇談』井上恠齋訳述、矢野龍溪補修、東陽堂、一八九六、一六五―一七八（睡美人）、『万年艸』巻六、一九〇三、山君訳、二二―一五（芙姫）。「山君」は父・森鷗外への支援を受けた森於菟の筆名。
- (30) バジール『ペンタメローネ 五日物語』杉山洋子・三宅忠明訳、大修館書店、一九九五、四二―四二六。
- (31) 周以量「日本における『太平広記』の流布と受容 近世以前の資料を中心に」和漢比較文学会編『和漢比較文学』二六号、二〇〇一、三三―四五。
- (32) 印刷本は『假名草子集成』第十二巻、朝倉治彦・深沢秋男編、一九九一、六〇―六三参照。同巻とつづく第十三巻（一九九二）に諸本が収録されている。
- (33) 「雲客張氏」として紹介され、「ウンカクチャウシ」とルビが打たれている。『假名草子集成』第十二巻、六一。
- (34) 太刀川清『怪談全書』考『野田教授退官記念 日本文学新見 研究と資料』笠間書院、一九七六、二四二―二四九、中村幸彦『林羅山の翻訳文学「化女集」「狐媚鈔」を主として』『中村幸彦著述集』第六巻、中央公論社、一九八二、七二―九、長澤規矩也『長澤規矩也著作集』長澤先生喜壽記念会編、第五巻、一九八五、深沢秋男『怪談全書』の諸本 付、『怪談』・『怪談録』・『奇異怪談抄』・『怪談録前集』近世初期文芸研究会編『近世初期文芸』第一〇号、一九九三、七三―一三九、黄昭淵『怪談全書』論 成立時期と出版過程についての推論』早大文学部暉峻研究室編『近世文芸研究と評論』五一号、一九九六、一一―一四。
- (35) 長澤一九八五、二九六―二九七、三〇七―三〇九、三二〇―三二二、三九八―四〇六、四三七―四四六、澤田瑞穂「林羅山と唐山小説・その他」『林羅山と唐山小説・その他』東洋文化学会『東洋文化』一七五号、一九三九、六五―七二、中村一九八二、二二―二九、黄一九九六など。
- (36) 『假名草子集成』第十二巻・第一三巻で公刊された。
- (37) 『假名草子集成』第十二巻、六三。
- (38) 黄一九九六、八一―九。
- (39) 李昭鴻「陸榘及其《古今說海》研究」中國文化大學文學院中國文學研究所博士論文、二〇一〇、二〇七。
- (40) 『太平広記』宋・李昉等編、明・許自昌校訂、全五二冊、明代刊（請求番号三〇九〇―一一五）、第六冊、『古今說海』明・陸榘編、全二〇冊、明嘉靖二三（一五四四）、儼山書院（請求番号三七〇〇〇三）、「亨 說淵」庚辛。
- (41) 『太平廣記會校』第一巻「整理説明」一―六。
- (42) 注（41）の文献および富永一登『太平広記』の諸本について『広島大学文学部紀要』五九号、一九九九、四二―六一。
- (43) 「林道春は記憶にすぐれ博識。だが儒者の道を説きつつ虚言を弄し、愚かにも仏僧として髪を剃り、仁義の教えを無視し、正道から逸脱し、朱子のいう口先だけのオウム。しかも自称は真儒」中江藤樹『日本思想体系』二九 中江藤樹

山井湧、山下龍二、加地伸行、尾藤正英校注、岩波書店一九七四、一六（漢文で書かれた原文を現代語訳した）。

- (44) 徳川幕府が豊臣宗家を滅亡させる口実とした悪評高い方広寺の鐘銘事件についての解説に際して、羅山を「牽強付会の珍説」を弄する「曲学阿世の魁」であり、「醜惡な心底」をもつ「人間として尊敬に値せぬ俗学腐儒の徒」と断じている。堀勇雄『林羅山』日本歴史学会編、吉川弘文館、一九六四、一九七。

- (45) 石田一良『林羅山』『江戸の思想家たち』、相楽良、松本三之介、源了圓編、全二巻、上巻、一九七九、三六二。

- (46) 本山幸彦『近世儒者の思想挑戦』思文閣出版、二〇〇六、一五―一六〇。

- (47) 鈴木健一『林羅山年譜稿』ぺりかん社、一九九九、鈴木健一『林羅山 書を読み未だ倦まず』ミネルヴァ書房、二〇二二。

- (48) 羅山の他宗教排斥については特に堀一九六四、宇野茂彦『林羅山・（附）林鵝峰』明德出版社、一九九二、一六〇―二二〇、今中寛司『近世日本政治思想の成立 惺窩学と羅山学』創文社、一九七二、一六一―四〇七、小高敏郎『近世初期文壇の研究』明治書院、一九六四、一九一―二〇一、大野出『日本の近世と老荘思想 林羅山の思想をめぐって』ぺりかん社、一九九七を参照。

- (49) 「浦嶋の辯」が典型——「神仙の説は渺茫かつ恍惚、信すべからず。海をわたつては蓬萊あり、山に登つては天台あり。

り。ゆえに劉晨も阮肇も天台の神女に逢い、李少君は海上の棗を得て、柳毅は水府の書を伝え、琴高や子英は鯉に乗って水面に現れ、黄土色の亀が溪路で指南を垂れ、令威の転じた鶴は華表に降りたち、王質の柄が石室で爛れてしまふ。かくのごときの類い、大概、妖妄に帰する。奇を好む者のほこる小説は、しかしこれらを多く含む。『林羅山文集』、京都史蹟會編纂、弘文社、一九三〇、三〇四（漢文で書かれた原文を現代語訳した）。

- (50) 木場貴俊『林羅山と怪異』東アジア怪異学会編『怪異学の技法』岩田書院、二〇〇三、三二―三三三。

- (51) 注(40)の文献参照。

- (52) 『林羅山詩集』、京都史蹟會編纂、弘文社、一九三〇、別冊「羅山林先生集附録目錄」、五八。

- (53) 「西銘講解」からの例——「そもそも太極が陰陽を生じ、陰陽が五行を生じ、変化と生克が万物を生ず。太極は理なり、陰陽は気なり、ゆえに陰陽は道なり。人や物の天と地よりいずる、もとよりこれ理一なり」『林羅山文集』三三七
- (54) 嚴錫仁『林羅山の理氣論』『倫理学』筑波大学倫理学原論研究会、二二二、一九九五、五七―六七。

付記：本稿は日本口承文芸学会大会（二〇一四年六月八日、東北大学）の口頭発表を新たに整理し、加筆・修正を加えたものである。来聴・質問してくださった皆様に感謝の意を表したい。

（よこみち・まこと／京都府立大学）